

《担当者名》飯泉智子 i-zumi@hoku-iryo-u.ac.jp

【概要】

本演習では、運動障害性構音障害、器質性構音障害に関する評価方法、介入方法の実際を学ぶ。また、評価に基づいた介入方針の考え方を修得する。

【学修目標】

<一般目標>

各障害の評価方法、介入方法の基本的な手技を修得する。

検査、観察でえられた情報を統合し解釈できる。

<行動目標>

1. 発声発語器官の運動および形態特徴を抽出し、それを記述できる。
2. 神経学的検査を実施できる。
3. 発話特徴、音の誤りを聴覚的に評価できる。
4. コミュニケーションを評価できる。
5. 検査、観察で得た情報を統合し解釈できる。
6. 典型的な所見を有する症例に対する介入方針を立案できる。
7. 典型的な所見を有する症例に対する介入方法を選択できる。
8. 主要な介入方法、基本的治療手技を実施できる。

【学修内容】

回	テーマ	授業内容および学修課題	担当者
1	オリエンテーション	評価報告書およびケース・レポートの記述について学ぶ 問題指向型学習の実施方法を理解する	飯泉智子
2) 5	運動障害性構音障害の評価	発声発語器官の運動および形態特徴の抽出と記述 神経学的検査 聴覚的印象による評価 コミュニケーションの評価	飯泉智子
6) 10	運動障害性構音障害の介入	検査、観察で得た情報を統合と解釈 介入方針を立案と介入方法の選択 主要な介入方法、基本的治療手技の実施	飯泉智子
11) 13	器質性構音障害の評価	発声発語器官の運動および形態特徴の抽出と記述 聴覚的印象による評価 コミュニケーションの評価	飯泉智子
14) 15	器質性構音障害の介入	検査、観察で得た情報を統合と解釈 介入方針を立案と介入方法の選択 主要な介入方法、基本的治療手技の実施	飯泉智子

【授業実施形態】

面接授業と遠隔授業の併用

授業実施形態は、各学部（研究科）、学校の授業実施方針による

【評価方法】

定期試験60%

課題20%

実技試験20%

【教科書】

使用しない

【参考書】

熊倉勇美 編著 「言語聴覚療法シリーズ9 改訂運動障害性構音障害」 建帛社 2009年
 Raphael, L. J. 他 著、廣瀬肇 訳 「新ことばの科学入門 第2版」 医学書院 2010年
 熊倉勇美 他 編 「標準言語聴覚障害学 発声発語障害学 第3版」 医学書院 2021年

廣瀬肇 他 著 「言語聴覚士のための運動障害性構音障害」 医歯薬出版 2011年
館村卓 著 「口蓋帆・咽頭閉鎖不全 その病理・診断・治療」 医歯薬出版 2012年
溝尻源太郎 他 編著 「口腔・中咽頭がんのリハビリテーション 構音障害、摂食・嚥下障害」 医歯薬出版 2000年
梶龍兒 編 「不随意運動の診断と治療 動画で学べる神経疾患 改訂第2版」 診断と治療社 2016年
楢原彰夫 編著 「PT・OT・ST・ナースを目指す人のためのリハビリテーション総論 要点整理と用語解説 改訂第2版」 診断と治療社 2011年
障害者福祉研究会 編 「ICF 国際生活機能分類 -国際障害分類改定版-」 中央法規出版 2002年

【備考】

演習の授業は臨床的態度、評価、治療手技の習得の場であり、毎回、必ず出席することを前提としている。やむを得ず欠席する場合は、担当教員のメールアドレス宛てに事前に連絡し、対応方法について指示を受けること。

音声、画像などの特殊教材を多用するので、受講方法に関する指示をよく確認すること。

発声発語障害学1で使用した教科書、配付資料等を持参すること。

担当者連絡先 飯泉智子：i-zumi@hoku-iryo-u.ac.jp

【学修の準備】

発声発語障害学1で使用した教科書、配付資料等をよく復習すること。(20分)

科学的文章作成能力の向上に努めること。(20分)

【ディプロマ・ポリシー（学位授与方針）との関連】

(DP3) 言語聴覚士として必要な科学的知識や技術を備え、心身に障害を有する人、障害の発生が予測される人、さらにはそれらの人々が営む生活に対して、地域包括ケアの視点から適切に対処できる実践的能力を身につけている。

【実務経験】

飯泉智子(言語聴覚士)

【実務経験を活かした教育内容】

医療機関のリハビリテーション部、および口唇口蓋裂センターでの実務経験を活かし、発声発語器官の問題によるコミュニケーション障害に対するリハビリテーションの基本的知識の活用、評価および治療等に要する技術の習得を指導する。